

A Way of Life

—Seko Koichi—

19号

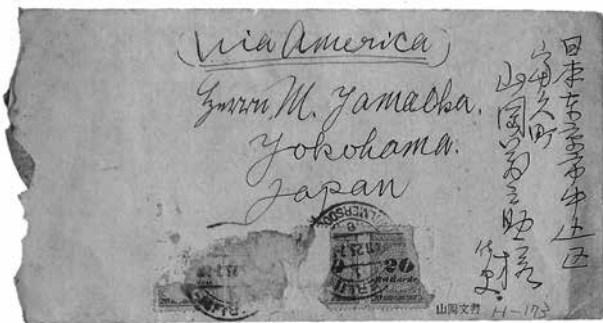
平成27年 3月

世耕弘一先生建学史料室広報

世耕弘一先生の山岡萬之助先生宛
一九二三年十一月十九日付書簡（ベルリン発信）

近畿大学名誉教授・建学史料室研究員 荒木 康彦

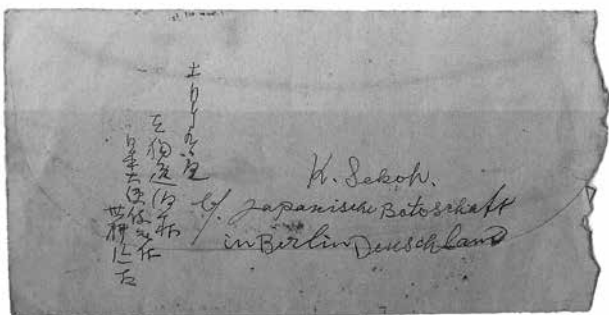
〔封筒の表面〕



(Via America)
Herrn M. Yamaoka,
Yokohama,
Japan

日本東京市牛込区
富久町
山岡萬之助様
侍史

〔封筒の裏面〕



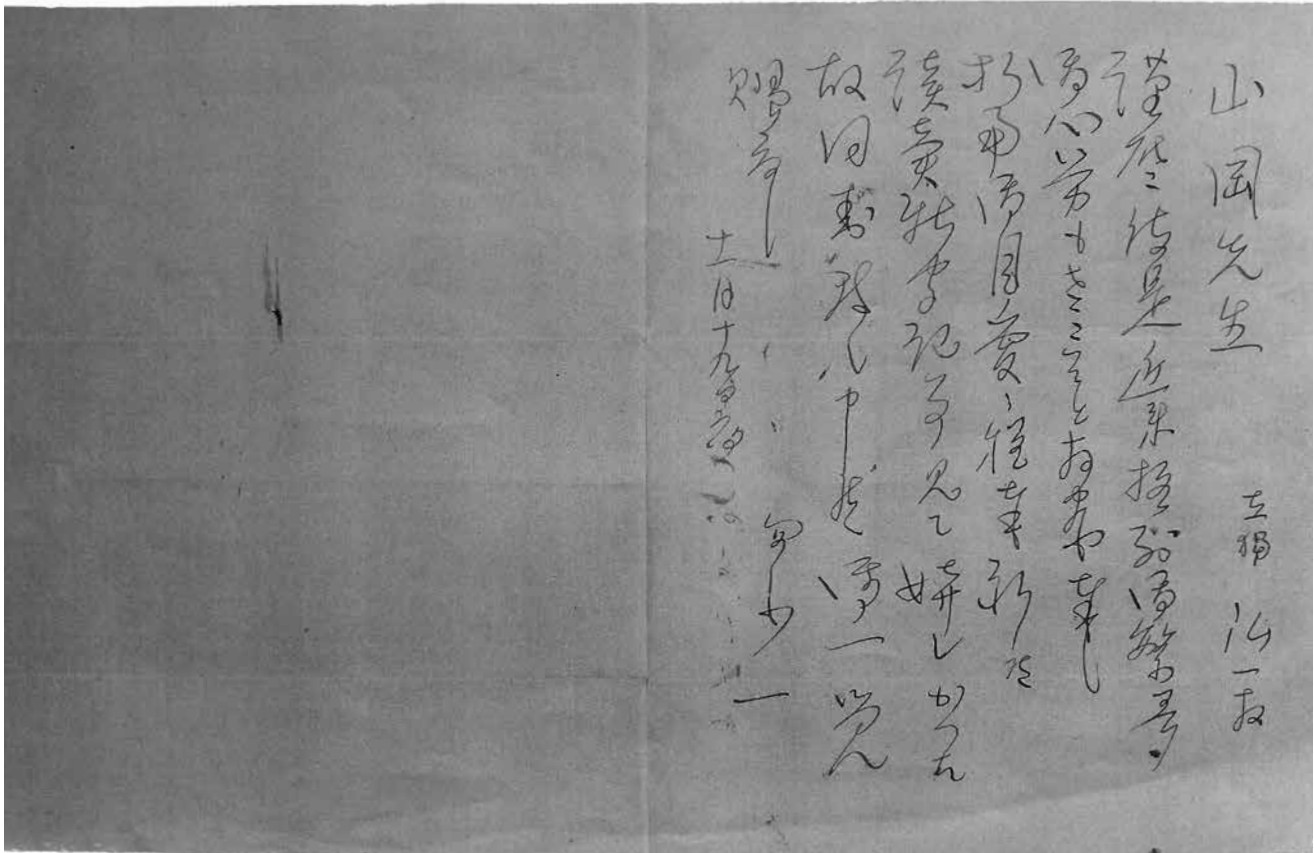
K. Sekoh,
b/ Japanische Botschaft
in Berlin Deutschland

十一月十九日認
在獨逸伯林
日本大使館気付
世耕弘一拝

- 本誌の前号掲載の拙論において、
1 学習院大学法経図書センター所蔵の「山岡萬之助関係文書」の中に、次のような、世耕弘一先生の山岡萬之助先生宛書簡（ベルリン発信）四通が収録されているのを発見したことを報告した¹⁾。
- ① 一九二三年十一月二日付書簡
〔山岡萬之助関係文書〕での整理番号H172）
同年十一月十九日付書簡（山岡萬之助関係文書）での整理番号H173）
- ② 一九二四年十月十日付書簡
〔山岡萬之助関係文書〕での整理番号H174）
- ③ 同年十月十一日付書簡（山岡萬之助関係文書）での整理番号H175）
- ④ その上で、①の書簡のコピーと書簡の解説文を掲げ、その意義を詳しく論じた。本号では②の書簡を、前号に続いて、組上に載せることにする。

黒色インクを用いたペン書きによる②の書簡は、縦が約九・五センチで横が約十八・二センチ（左端が千切って開封されているので、本来はもう少し横長であったろうと想われる）の封筒、縦が約十九・七センチで横が約三十一・五センチの便箋から成るものである。そして、新聞の切抜が同封されており、そこには世耕弘一先生御自身の文字で「東京の讀賣新聞の記事です。」と書き込まれている。そこで先ず、封筒の表面と裏面及び便箋のコピーとそれらの解説文を掲げ、その後②の書簡について聊か管見を書き連ねることにしたい。

〔便箋〕



山岡先生 在獨 弘一拝

謹啓 彼是近来格別御繁多

御心労もさこそと拝察奉候

折角御自愛之程奉願候

讀賣新聞記事見て嬉しかった

故同封致し申候御一覽

賜度候 勿々不一

十一月十九日夜

この書簡の封筒の表面に記載されていることで注目に値するのは、次の二点である。

(一)「アメリカ経由」(Via America)とされている点

(二)①・③・④の書簡が、いずれも「東京 日本」(Tokyo, Japan)とされているのに対して、この書簡だけは「横浜 日本」(Yokohama, Japan)とされている点

大正十二(一九二三)年三月十六日の『中外商業新報』掲載記事²において、大阪商船は同社の横浜・シアトル間の定期便で「十二日半」と契約先の「シカゴミルオーキー」鉄道会社³のシアトル・ニューヨーク間の鉄道便による一週間の「合計十九日」で、横浜・ニューヨーク間において輸送ができるようになった旨が、報じられている。また、一九二三年刊行の『公認 汽車汽船旅行案内 第三四六號』掲載の「日本郵船會社 米國線發着表」を参照すると、日本郵船の汽船の場合、横浜・シアトル間の所要日数が十七日ほどである⁴。大西洋便の場合を、トマス・クック社によって、一九二三年に刊行された時刻表である *Cook's Continental Time Table And Steamship Guide*⁵ の *ロイヤル・メール・ステイム・パケット (Royal Mail Steam Packet)* 社がニューヨーク・ハンブルク間に定期便を運航しており、所要日数は十一・十三日ほどである⁵。世耕弘

一先生が「アメリカ経由」で「横浜」と指定されているのは、以上のよう
な大西洋航路とアメリカ大陸横断鉄
道及び太平洋航路に要する日数の合
計が、スエズ運河經由航路に要する
日数よりも短いということを踏まえ
ての御判断によるものと想われる。

②の書簡の封筒裏面では、①の書
簡と同様に、ベルリンの日本大使館
気付けとなっている。それは、この
広報誌の前号で述べたように、山岡
先生から返事が来る場合、ベルリン
の日本大使館気付けの方が確実・安
全と判断された結果であろう。事
実、ベルリンの日本大使館の別館
(アーホルン [Ahorn] 通り一番) -
当時ベルリン在留の日本人は、日本
大使館の事務室と呼んでいた¹に届
いた手紙を置いておく場所があり、
そこに大使館気付けで自分宛に来た
手紙がないか、見るために来ていた
ようである⁶。このアーホルン通り
は、後に触れる地図 I の場合で言う
と、一番下のセクションの十三にある。
貼付されていた切手が失われている
①の書簡とは異なり、②の書簡の
封筒表面には、貼付されていた四枚
の切手が磨滅しながらも、ある程度
残っている。ハイパーインフレー
ションの時期の切手の紙質があまり
良くなかったせいもあって、磨滅し
たのであろうか。これらの四枚の切
手に印刷されている文字を、この当
時の切手を参考にして、解読してみ
ると、次のようになろう(論証の詳
しい過程は、これを省く)。



Deutsches Reich
20
Milliarden
20 000 000 000 M

ドイチェス・ライヒ (Deutsches Reich)⁷の二〇〇億マルク切手であることが、印刷されている。したがって、四枚で八〇〇億マルク分の切手が貼付されていることになる。ハイパーインフレーションの時期のドイツから日本宛の郵便料金の正確で詳しい推移に関する一次史料は今のところ見出せないが、国内便の書簡の最低郵便料金の推移は次のように、纏めておくことができる⁸。

一九二二年四月一日改正で〇・六マルク、一九二二年一月一日改正で二マルクであったが、ハイパーインフレーションが進行した一九二三年の一月十五日に改正されて五十マルクとなるが、同年中にこれも含めて十六回改正され、十六回目(十二月一日)には一千億マルク、レンテンマルクで〇・一マルクとなっている。ここで特に関係あるのは同年十一月十二日の十三回目の改正で一〇〇億マルク、同年十一月二十日の十四回目の改正で二〇〇億マルクとなっていることである。ドイツから日本宛書簡の郵便料金もドイツ国内便のそれと同調して推移しているはずであるから、一九二三年十三回目の改正

の結果、八〇〇億マルクとなっ
るのであろう。

横並び四枚の切手の二枚づつに消
印が計二か所押されているが、切手
が磨滅しているために、消印も完全
には判読できない。これらの二か所
の消印に判読できる文字を、③及び
④の書簡の封筒にある消印の文字を
参考にして、解読してみると、次の
ようになろう(論証の詳しい過程
は、ここにおいてもそれは省くこと
にする)。



BERLIN
1
?? 11 23 7-8 N
6
WILMERSDORF

一九二〇年に成立した大ベルリ
(Groß-Berlin)には二〇の区が
あり、そのうちの一つの区がヴィル
マースドルフ (Wilmerdorf) 区で
あり、大ベルリンの西南部の区であ
る。したがって、この書簡は大ベル
リンのヴィルマースドルフ区で投函
されたことは、言うまでもない。三
行目の数字は投函日時を示すもの
で、「1923年11月??日午後7-
8時」と解せられる。したがって、
便箋の最後の行にある「十一月十九
日夜」の、封筒の裏面にある「十一
月十九日認」の十一月十九日は、
一九二三年十一月十九日であると確
定出来るのである。「十一月十九日
夜」に認められた②の書簡はアメリ

カ経由で早く着くように発信されて
いることからすれば、この書簡の消
印で消えている「??」、即ち投函日
は、その翌日と考えるのが順当であ
ろうから、「20」であろう。したがっ
て、投函日時は「1923年11月20
日午後7-8時」ということになろ
うか。

世耕弘一先生は『日本大学七十
年の人と歴史』第二巻に寄稿された
「ドイツ留学の思い出」において、ベ
ルリンでの下宿について次のように
触れられている。

(前略) 私がベルリンで下宿し
ていた家の人は、非常によい人
だった。私はベルリンに着いた最
初からその家に下宿して、五年間
づつと居った。現在は西ドイツの
方になっているか、ベルリンのウ
イルマースドルフという街のヒンデ
ンブルグの名前のついた八十何番
地かで、ハンス・ウイエルデとい
う二階建の家であった。(後略)

世耕弘一先生が言われる「ウイ
エルマースドルフ」とは消印にあ
る Wilmerdorf 区、即ちヴィルマ
ースドルフ区のことであろう。洵に饒
倅としか言いようがないのだが、私
は英文によるベルリン旅行案内書
Berlin and its Environs を昭和五〇
年に古書肆で買ったが、平成二五年
の「世耕弘一先生ドイツ留学90周年
記念史料展示会」の展示史料の一つ
として役立つのではないかと想い、

本書を書屋から取り出し掃塵して、一穂の寒燈の元で繕き、改めて仔細に閲読すると、一九二三年にドイツのライプチヒで刊行されたものであった¹⁰！ 本書の巻頭に収録されているベルリン全体の地図(地図Ⅰ)を見ると、大きく三つのセクションに分けられ、更に夫々が四十二に分かたれている。その一番下のセクションの南西部にWilmerdorfがある。だが、大変残念なことには一番下のセクションの最下段が少し切れていて、全部が収録されていない。そこで、本書の巻末に収録されている大型の折り込み詳細地図の該当部分(地図Ⅱ)を見てみると、名称変更されて、現在のベルリン地図には見いだせない。ヒンデンブルク通り(Hindenburg Straße)が確認出来た。だが、ヒンデンブルク通りはヴィルマースドルフ区の南端に東西に長く延びる通りであって、世耕弘一先生の下宿先のハンス・ヴィルデ(Hans Wilde)宅が地図Ⅱにあるこの通りの奈辺に位置するかは、難しい問題である。それはベルリンの当時の住所登録などの公文書の採取によって、はじめて最終的に解決できるであらう。

先生の下宿先のヴィルデ家のあったヒンデンブルク通りは、前述のようにヴィルマースドルフ区にあったが、遺憾なことに、同区も第二次世界大戦中の空襲の被害が小さくないところであり、現在のベルリン地図などで見ると、旧ヒンデンブルク通りは幾分改修されて様子が変わり、二分割されて、ヴァーレンベルク通り(Wallenbergsraße)とアム・フォルクスパーク(Am Volkspark)に名称変更されている。詳しくは、ベルリンでの実地調査及び史料採取を俟つしかないであろう。

3

この②の書簡の本文は八十文字足らずの短いものであり、発信の意図は五行目から七行目にかけてであり、「讀賣新聞記事見て嬉しかった故同封致し申候御一覽賜度候」つまり「讀賣新聞」に山岡先生の記事が掲載されているのを世耕弘一先生が見出されて嬉しかったので、切り抜きを同封したので御一覽を賜りたいということに尽きる。

切り抜きされて同封されていたのは、「小石川巢鴨の災を救つた山岡局長のお手柄」という見出しの記事であり、震災の際に巢鴨刑務所に収容されていた囚人の破獄の動きを知らされた「司法省の行刑局長山岡法学博士」は厳しく対処するように指示を与えて、その結果「空鉄砲」による威嚇で囚人の破獄が未然に防が

れたという内容である。その結果、巢鴨町池袋一带から小石川の大半が放火の厄を免れたのは、全く「山岡鬼局長」のお陰だと省内の評判は大したものだとされている。

細島喜美著『人間山岡萬之助傳』所収の「略歴譜」には大正十(一九二一年)年「六月、司法省令審査委員、司法省監獄局長、のち官制改革によって行刑局長となる。」¹¹とあるが、具体的にこの官制改革が何時だったかは記されていない。そこで司法省の官制改革に関する史料を博搜した結果、大正十一年五月二十五日公布の「勅令第二百七十七号」の「第四條」に「監獄局」を「行刑局」に改めるとされてゐる¹²のを見出した。したがって、山岡先生が「官制改革によって行刑局長」となったのは、これによるのである。関東大震災の時の山岡先生の肩書が、この記事で、司法省行刑局長とされているのは正しいと言える。

切り抜いて同封されていた記事は、大正十二(一九二三年)年の何月何日の『讀賣新聞』に掲載されたものであるとの記載がない。そこで同年刊行の『讀賣新聞』でこの記事を具さに探索したところ、同年九月十四日の『讀賣新聞』朝刊¹³に掲載されていることが確認出来た。したがって、世耕弘一先生が②の書簡を一九二三年十一月十九日夜に認められているから、六十七日ほど前に発刊されていた『讀賣新聞』の記事を閲覽された旨を記載されたというこ

とになる。この当時の日本人はベルリンに赴く場合、横浜・神戸からスエズ経由の船便を利用してマルセイユまで行き、そこからは鉄道を利用してベルリンに行くのが一般的であり、世耕弘一先生の渡独もこのルートで神戸からベルリンまで四十五日を要したと述べておられる¹⁴。しかし、荷物はコストパフォーマンスの良いルートで、横浜・神戸から運ばれたであろうから、その点については別途考察する必要がある。

そこで、先に触れた一九二三年刊行のトマス・クック社の時刻表 *Cook's Continental Time Table And Steamship Guide* を繙く¹⁵。"OSAKA SHOSEN KAISHA, Europe-Japan Service."¹⁵の欄があり、大阪商船会社が一九二三年には横浜・神戸からハンブルクまでの定期便を運航しており、横浜からハンブルクまでは五十五日乃至六十日ほど要していたことが分る。それ故に、このような船便を利用して『讀賣新聞』などの日本の新聞がドイツにも齎されたとしても、世耕弘一先生がそれを発刊六十七日ほど後にベルリンで閲覽されるのは、充分可能である。

世耕弘一先生は、①の書簡において日本の新聞を閲覽されていた様子を、次のように陳述しておられる。

(前略) 折柄突然日本人倶楽部に於て日本大学小石川及九段に於て開校すとの朝日新聞記事を拝見実

際あの時位嬉しき事無之人前も憚
からず思はず母校万歳先生万歳を
となへ申候（後略）

したがって、②の書簡にある『讀
賣新聞』もこの「日本人倶楽部」で
閲覧されたと考えるのが、順当であ
ろう。ここで「日本人倶楽部」と言
われているのは、一九二三年にベル
リン在住の日本人によってビュ
ロー(Bülow)通り二番に設立された
「獨逸日本人會」¹⁶を指すものと想わ
れる。しかも、この「獨逸日本人會」
の設立に貢献した中心人物は、「日
本大学留学生」として一九二二年か
ら一九二三年にかけてベルリンに在
留した原惣兵衛(八九一―九五〇)
であった¹⁷。「獨逸日本人會」が置
かれたビュロー通りも、やはりベル
リン在留の日本人が多く住むベルリ
ン西南部であり、地図Iで言えば一
番下のセクションの十七である。

また、ここで当時のベルリンに日
本人が何人ほど在留していたの
かを瞥見しておく必要もあるだろ
う。大正十三(一九二四)年六月現
在でドイツ国内に在留する日本人を
職業別に纏めた「獨逸在留帝国臣民
職業別表」¹⁸をハンブルク駐在の総
領事花岡次郎が外務大臣幣原喜重郎
(一八七二―一九五一)に同年八月
十日に提出している。この非常に複
雑な表に挙げられている数字を必要
な限りで整理すると、次のとおりで
ある。

ドイツ国内に在留する「本邦内地人合計」	1,175人(男性：1,089人/女性：86人)
その中の「本業者」	1,094人(男性：1,077人/女性：17人)
その中の「家 族」	81人(男性： 12人/女性：69人)
ベルリン内に在留する「本邦内地人合計」	977人(男性： 934人/女性：43人)
その中の「本業者」	935人(男性： 931人/女性： 4人)
その中の「家 族」	42人(男性： 3人/女性：39人)

更にベルリン内に在留する「本邦
内地人」の「本業者」の九三五人の
中の三七七人(男性三七六六・女性
一人)が「教育関係者」となってい
る。したがって、この男性「教育関
係者」三七六人の一人が世耕弘一先
生ということになる。

昭和二(一九二七)年に渡欧した
哲学者和辻哲郎(一八八九―
一九六〇)は、妻宛の「昭和二年五
月五日付書簡」(ベルリン発信)に
おいて、同年四月三〇日に「夕食を
たべに日本人会に行き、新聞を少し
よんだ。」と述べ、「朝日と毎日の夕
刊」を挙げている¹⁹。ここからも分
るように、この当時のベルリン在留
の日本人は、日本の様子をを知るた
めに「日本人倶楽部」とも呼ばれてい
た「獨逸日本人會」で、そこに備え
付けられた日本の各種の新聞を閲覧
していたのである。ましてや、この
②の書簡が発信された時期は関東大
震災の直後であり、世耕弘一先生は
日本の様子、就中灰燼に帰した日本
大学に関する事に想いを馳せておら
れた砌に、「獨逸日本人會」備え付
けの『讀賣新聞』に掲載されていた
恩師山岡萬之助先生の大車輪の活躍
の記事に接して歓喜極まり、そのこ
とを遙かベルリンから知らすべく、
一気呵成に文を認めずにはおられな
かったという訳なのであろう。

十八号(二〇一四年)掲載の荒木
康彦「世耕弘一先生の山岡萬之助
先生宛一九二三年十一月二日付
書簡(ベルリン発信)について」。
山岡萬之助先生の略歴はこの論考
の冒頭部で触れているので、ここ
では省く。

2 大正十二(一九二三)年三月
十六日の『中外商業新報』掲載記
事、神戸大学電子図書館システム
新聞記事文庫 海運(22-073)。

3 この鉄道会社の正式名称は、シカ
ゴ・ミルウォーキー・セントポール&
パシフィック(Chicago,Milwaukee,
St.Paul & Pacific)鉄道会社である。

4 『公認 汽車汽船旅行案内 第
三四六號』(大正十二年)二二二頁。
5 Thos.Cook & Son,Cook's
Continental Time Table And
Steamship Guide, London
1923,p.295.

6 和田博文・真鍋正宏・西村将洋・
宮内淳子・和田桂子共著『言語都
市ベルリン 1861-1945』(藤原
書店 平成十八年)三九二頁。以
下、本書は『言語都市ベルリン』
と略称す。大正十一(一九二二)

年から翌十二年までベルリンに
滞在した阿部次郎(一八八三―
一九五九)も「私は伯林にある
間、たびたび大使館に手紙をさが
しに行った。」と、『游欧雑記

独逸の巻』(『阿部次郎全集』第七
卷(角川書店 昭和三六年)所収)
三五三頁。)で述懐している。また、
和辻哲郎は昭和二(一九二七)年

注

1 『世耕弘一先生建学史料室広報
A Way of Life - Seko Koichi -』

四月一日にベルリンから妻宛に出した書簡で、同月一日に「大使館へ行く」日本からの二通の書簡を受け取ったと報じている(『和辻哲郎全集』第二五卷〔岩波書店 平成五年〕二二二頁)。以下、本書は『和辻哲郎全集』と略す。これらで触れられている「大使館」とは、既に述べたように、アーホロン(Ahorn)通りにあった大使館の事務室である。

7 Reichは通常、帝国の訳語が充てられるが、少し注意を要する。ドイツでは帝政が倒れヴァイマル共和国の時代になっても、帝政以来のReichという名称は使われたからである。

8 Roy Lingen, *German Inflation 1923*. Retrieved from <https://www.buckcover.com/articles/roy/germinflshmtl>

9 桜門文化人クラブ編『日本大学七十年の人と歴史』(第二巻 洋社 昭和三十六年)収録「ドイツ留学の憶い出」十四―十五頁。

10 Karl Baedeker, *Berlin and its Environs*, Leipzig 1923.

11 細島喜美著『人間山岡萬之助傳』(講談社 昭和三九年)二五二頁。
12 『官報』二九四三三号(大正十一年五月二十六日)。

13 大正十二年九月十四日付『讀賣新聞』朝刊の第三面。

14 高山良福・原嶋亮二編『小林錡先生』(小林錡先生顕彰会 昭和三八年)六頁。

15 Thos. Cook & Son, *Cook's Continental Time Table And Steamship Guide*, London 1923, p.204.

16 外務省外交史料館所蔵史料K3門3類7項0項目11号「昭和六年在外邦人諸団体関係一件 三」に、この当時のドイツ駐在特命全権大使小幡西吉が外務大臣幣原喜重郎宛ての昭和六年十二月六日付「公第二八九號」で提出した「在当地本邦人諸団体調査報告」が収録されている。そこでは当時ドイツに在留した日本人が組織していた五団体についての調査結果が報告されており、その中に「獨逸日本人會」についてのそれがある。『言語都市ベルリン』三八七頁で、「獨逸日本人會」に関する公文書として挙げられているのは、この史料のことと思われる。

17 吉田勘三・高山福良編『原惣兵衛の横顔』(原惣兵衛先生顕彰会 昭和三八年)一一四―一一七頁。最初は俱樂部として企画されたが、永続的なものとするために運営母体として「獨逸日本人會」の設立となったとされている。そのため、「日本人俱樂部」とも「獨逸日本人會」とも呼ばれていたようであり、正式の所在地はビューロー通り二番であったが、ノーレンドルフ広場(Nollendorfplatz)に近接するところから、多くの日本人は「獨逸日本人會」の所在地としてノーレンドルフを挙げてい

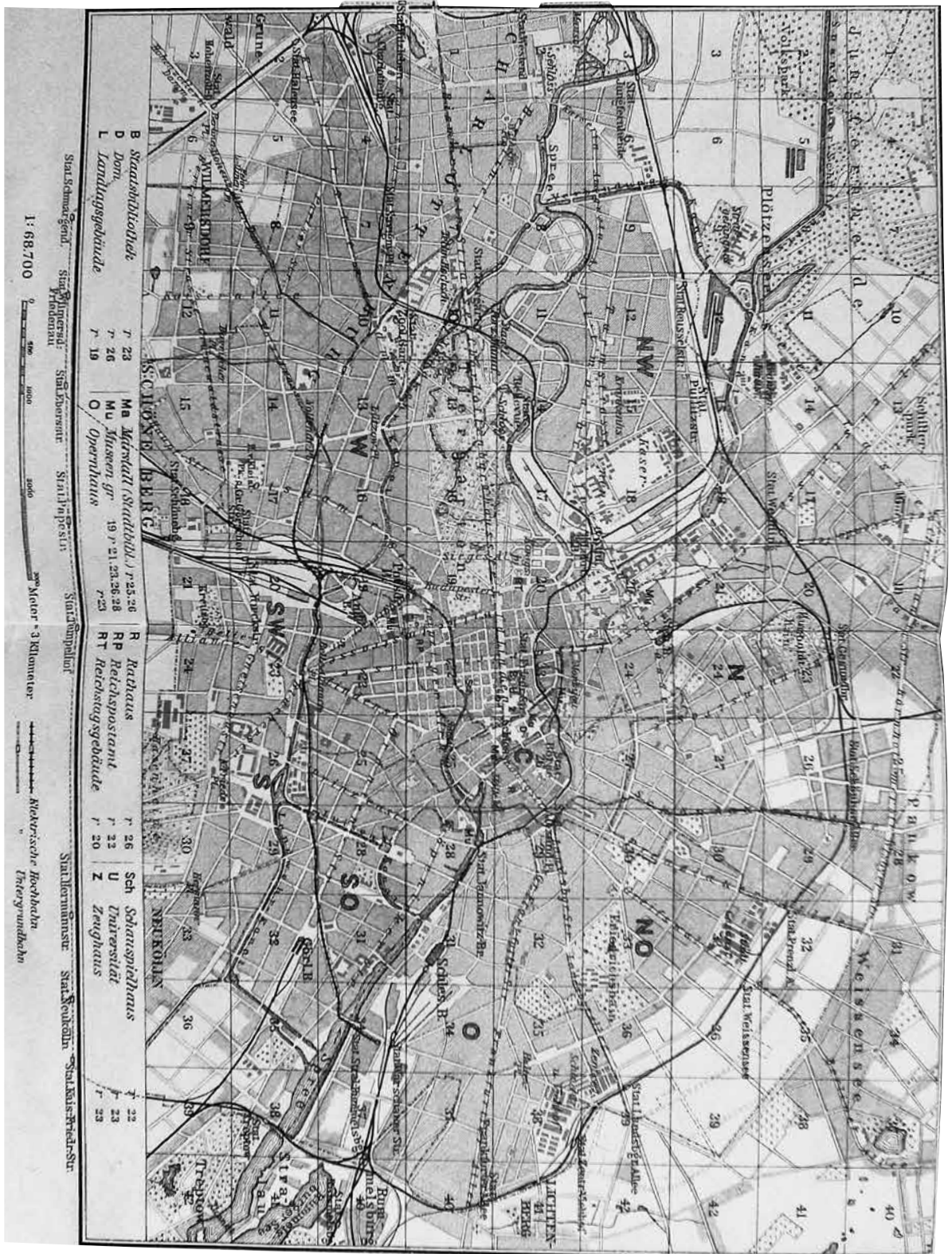
る(前掲書一一四頁)。地図Ⅱ参照。また、「昭和のはじめ」ベルリンに留学した山本勝市(一八九六一―一九八六)も、世耕弘一先生が帰国される際に「ノツレンドルフプラッツにあった日本人クラブで送別会をやった。」と述懐している(回想世耕弘一編纂委員会編『回想世耕弘一』(回想世耕弘一刊行会 昭和四六年)九三頁)。

18 外務省外交史料館所蔵史料7門1類5項4号「大正十三年海外在留本邦人職業別人口調査一件 第二十七 在歐洲各館」収録

19 『和辻哲郎全集』第二五卷二二三―二三四頁。この年にはシベリヤ鉄道の国際的利用が本格的にできるようになり、日本の新聞も非常に早くベルリンに届くようになったと思われる。

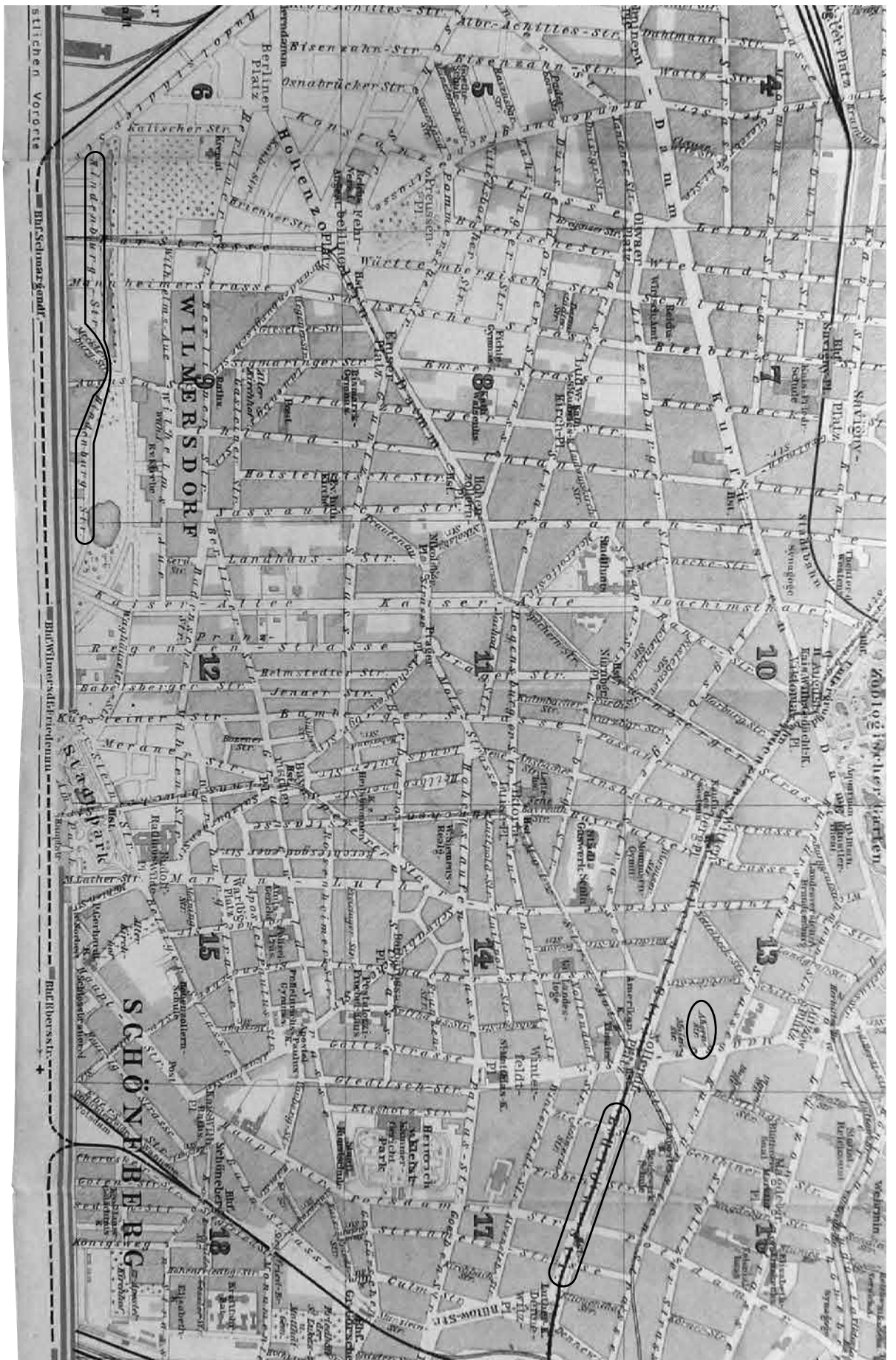
追記

一、年の表記は、原則として、その史料・文献に記載されているものに従い、またヨーロッパにおける場合は西暦を、日本における場合は年号を使用している。
二、近畿大学の関係者のみは「先生」としたが、それ以外の人士については敬称を省いているので、この点は諒とされたい。
三、原典尊重の観点から引用史料の表現・漢字は、原則として、そのままにしている。



地図 I

一番下のセクションの下辺部が少しカットされているために見えないが、その「6」「9」「12」の下辺部に、世耕弘一先生の下宿があったヒンデンブルク (Hindenburg) 通りがあった。同じく「13」には日本大使館の事務室が、「17」には「獨逸日本人會」があった。



地図II

「6」「9」「12」の下辺部に、世耕弘一先生の下宿があったヒンデンブルク (Hindenburg) 通りが認められる。「13」に日本大使館の事務室があったアーホルン (Ahorn) 通りが、「17」に「獨逸日本人會」(日本人倶楽部) があったビューロー (Bülow) 通りが認められ、この両者の間は近距離であることが注目される。

アーカイブズ研究活動報告

建学史料室研究プロジェクト
学内研究会(講演会)開催報告

平成二十六年十二月二十日、ブ
ロッサムカフェ三階会議室Aにて、
建学史料室主催の学内研究会(講演
会)が行われた。今回は、立命館大
学史料センター準備室課長補佐奈
良英久氏に講師を依頼し、立命館大
学における百年史編纂及び史料セ
ンター開設に向けた取組について講
演して頂いた。参加者の内訳は、教
員十人、職員四十二人の合計五十二
人であった。

講演でまず取り上げられたのは、
立命館大学における『立命館百年史』
編纂の取組についてであった。『立命
館百年史』は、通史第一巻、通史第
二巻そして通史第三巻の三部立てで
構成されており、平成三年の着手か
ら、資料編三の刊行まで、足掛け
二十三年にわたる大事業となったと
のことであった。

編纂の工夫として、編纂委員会と
理事会のメンバーを共通にすること
で、編纂委員会での決定が、そのま
ま学園としての決定となる仕組みを
採用したことが紹介された。また、
通史第三巻については、教員、職員
及び教諭からなる陣容により執筆さ
れたとのことであった。なかでも、
最終的に執筆者となった人数では、

教員より職員が多いことが強調され
ていた。

次に紹介されたのは、史料セン
ター開設に向けた取組であった。私
立大学のアイデンティティをどう醸
成するかにも最も力点が置かれてお
り、機関アーカイブと収集アーカイ
ブという二つの機能を併せ持つ組織
であることが特徴とのことであっ
た。また、職員中心の組織として、
できることにしつかり取り組むとい
う方針の下、資料目録の公開、ホー
ムページを通じた情報提供といった
具体的な機能を担うことが紹介され
た。

講演終了後は質疑応答が行われ
た。まず、職員中心で史料センター
を運営することの意義については、
職員であれば業務に関する文書の重
要度を知悉していることから、その
処分について適切な判断が下せると
のことであった。次にクラブ活動に
関連する賞状やトロフィーについて
は、依頼があれば拒まずに受け入れ、
写真撮影をしたのちプレート等のみ
を残すといった方法が紹介された。

本学よりも先行して、年史編纂及
び史料センター開設に取り組んで
おられる立命館大学の実情が詳細に
紹介され、教職員共々大いに参考に
なったものと思われる。荒天の中、
わざわざ足をお運びくださった奈良
英久氏に改めて御礼申し上げる次第
である。

(法学部教授
建学史料室研究員 上崎 哉)



講演者の立命館大学史料センター準備室課長補佐 奈良 英久氏



学内研究会(講演会)風景(平成26年12月20日)

現況調査報告

第二回総務部現況調査

(平成二十六年十二月三日)

建学史料室研究員富岡勝と上崎
哉、藪下信幸及び同室職員澤田和
典、西尾さかえの五人で、総務部
保管の校史関係史料の第二回現況
調査を行った。今回は総務部職員に
案内いただきながら、未整理の学生
部関連史料が一時保管されている
十八号館六階のスペースを見学調査
した。大阪専門学校時代から昭和
四十年代にかけて各体育会が競技大
会で受賞した賞状やトロフィーなど
の現物資料の所在を確認した。学生
部で保管が制度化される以前の貴重
な史料群が学内に保存されている
ことを確認できたことは、体系的な
大学アーカイブズ作成において大き
な意義があり、今後は学生部管掌の
現物史料リストとの整合をはかり
たい。

(経済学部准教授

建学史料室研究員 藪下 信幸)

第三回総務部現況調査

(平成二十六年十二月十七日)

建学史料室研究員富岡勝と上崎
哉、藪下信幸及び同室職員澤田和典、
西尾さかえの五人で、総務部保管の
校史関係史料の第三回現況調査を
行った。今回は、第一回調査で見学
調査を行った本館倉庫に収蔵されて
いる整理済み史料について、総務

部職員の案内と立会いのもと、いくつかのシェルフに収蔵されている史料のシリーズ名の把握や大まかな冊数などの予備調査を行った。今回の調査では、昭和二十六年頃から三十年代末にかけての時期の多岐にわたる設置認可関係公文書の所在が確認できた。今後も本館倉庫に収蔵されている史料の調査を継続し、長期にわたる本学法人の発展過程を明らかにしていきたい。

(経済学部准教授

建学史料室研究員 藪下 信幸)

第一回学生部調査

(平成二十六年十一月二十六日)

建学史料室研究員の富岡勝・稲葉浩幸・藪下信幸・井田泰人、同室職員の西村広光・澤田和典が参加し、学生部の管理史料(学籍簿・公文書などの書類)の保管場所、保存状態を確認するために調査を行った。学生部職員の誘導・案内により、一五号館、一一号館、一〇号館、本館の順で史料保管場所へ移動し、各種史料について解説を受けた。今回の調査で学生部関係の史料アーカイヴズ作業が一歩前進し、校史編纂業務における史料の優先順位もある程度付けられた。今後は確認できた事務資料のリストを作成するとともに、クラブ管理の資料(優勝旗・盾・賞状など)についての調査を進めていくことにしたい。

(短期大学部教授

建学史料室研究員 井田 泰人)

第一回中央図書館現況調査

(平成二十六年十一月十九日)

建学史料室研究員の富岡勝、井田泰人、稲葉浩幸、荒木康彦、同室職員の澤田和典、近藤明子、木村道子の七人で、中央図書館に保管されている校史関係史料の第一回現況調査を行った。今回は中央図書館職員によって作成された所蔵状況リストに基づき、『中央図書館 図書館運営委員会議事録』、『中央図書館 図書館報』、『中央図書館 図書館だより』、『中央図書館 Library Guide』などの史料を中心に閲覧した。今回の調査については、事前に打ち合わせを行いながら調査活動を進めていくこととなった。

(経営学部教授

建学史料室研究員 稲葉 浩幸)

第二回中央図書館現況調査

(平成二十六年十一月十七日)

建学史料室研究員の稲葉浩幸、荒木康彦、同室職員の澤田和典、近藤明子、木村道子の五人で、中央図書館における校史関係史料の第二回現況調査を実施した。今回は中央図書館職員による引率で、貴重書室、マイクロフィルムなどが保管されている特殊資料室、和装本の保管室、特別書庫、倉庫、十一号館一階書庫、十一月ホール地下二階書庫を見学調査した。また、寄贈図書資産台帳を所蔵状況リストに基づいて確認した。次回からはこれまで行ってきた現況調査の結果を踏まえたいうで、

シリーズごとの整理票の作成などに着手していきたい。

(経営学部教授

建学史料室研究員 稲葉 浩幸)

第七回勉強会

(平成二十六年十月二十五日)

第六回議事録確認の後、学内校史関連史料現況調査方法の変更についての提案、アーカイブズ関連文献の講読会、甲南学園資料室調査の報告、学内研究会の開催案内、建学史料室広報誌投稿要領の検討、今後の長期計画についての討議、建学史料室の情報発信についての報告、追手門学院での講演会案内、我々の研究成果に基づく論文の披露がなされた。

(短期大学部教授

建学史料室研究員 田窪 直規)

近畿大学をめぐる史料 2

—『小若江文学』 五月号 一九三一年—

教職教育部教授

建学史料室研究員 富岡 勝

新発見?の学生文芸雑誌

前回同様、インターネットの古書店を通じて購入した史料を紹介したい。『小若江文学』と題した活版印刷によるA5サイズの雑誌で、表紙に「五月号 一九三一年」と書き添えられている。この雑誌は国立国会図書館や全国の大学図書館などに

所蔵されているかと思っ、各機関の蔵書検索(OPAC)のページで検索してみたが見つからなかった。OPACは万能ではないが、もしかしたらどこにも所蔵されていない資料を発見できたのかもしれない。奥付の情報を確認してみよう。誌



表紙



奥付

名は小若江文学第一巻第一号、発行は一九三二年(昭和六年)五月一日と記載されている。巻頭言で「吾等の小若江文学創業第一週年(原文ママ)が茲にめぐり来つた」と書かれているので、創刊は一九三〇年のように思われるが、一九三一年の五月号が「第一巻第一号」と書かれているのは矛盾しているようにも見える。しかし巻末の編集後記に、「小若江文学塾生の第一号だ」と書かれていることに注目すると、何らかの事情でいったん廃刊したものが復活したのかもしれない。

発行所は「大阪府大軌沿線長瀬大学通り」の日本大学専門学校文芸部となっている。

長瀬大学通りの日本大学専門学校とは、今から九〇年前の一九二五年（大正一四年）に設立された本学の出发点であり、以後の分離・改組・拡充を経て現在の近畿大学へつながっている。

『近畿大学創立65年の歩み』（近畿大学、一九九〇年）には、日本大学専門学校頃の写真として、文芸部、剣道部、応援団、柔道部、乗馬部、端艇部、野球部、相撲部、陸上競技部の写真が掲載されているので、文芸部があったことは確認できるが、活動の詳細は、現在ではほとんど分らなくなっているのではないだろうか。

発行兼編集兼印刷人は田村節三である。田村節三の名前は、手元にあった『校友名簿 昭和四十六年』（近畿大学校友会名簿作成委員会編集、近畿大学校友課発行、一九七一年）ですぐ確認でき、商科（一部）の昭和七年（一九三二年）卒業生（第五回卒業生）の一人であることが判明した。日本大学専門学校は修業年限が三年であったから、この雑誌の発行時に在学していた可能性は高い。

また、「一冊 定価 金十銭」と書かれており、有料である。同じ頁の「原稿募集」には締切が「毎月二十五日」と書かれているので、月刊雑誌であったと思われる。さらに、「優秀作品には相当稿料を呈す」こ

とも記されている。

執筆者について

目次に記載されたタイトルと執筆者は以下の通りである。

巻頭言

紀行文 「西南遊記」（田村節三）

創作 「女教師」（牧ぎやう）

戯曲 「隼人正と八郎兵衛」（成山山人）

創作 「女難」（岩野小景）

長詩 「車窓の断想」（伴洋）

散文 「一生の希ひ」（阿蘇道夫）

創作 「オフィスガールは」（杉田草代）

キネマストーリー

「哀傷」（伊藤武仁）

編集後記

『校友名簿 昭和四十六年』で探すと、伊藤も商科（一部）の昭和七年卒業生であった。同じ商科（一部）の昭和七年卒業生として「岩野」の名前も見える。「岩野小景」はこの人物のペンネームかもしれない。編集後記に田村以外に「伊藤岩野両君」が編集委員であったことが記されている。「成山山人」が田村節三のペンネームであったことも編集後記から分かる。

巻末に原稿募集の告知があり、「知識階級男女各人の投稿自由」となっている。在学以外にも開かれたメディアであった。牧ぎやうについては「伸びる女流作家」と編集後

記で記されている。なお、一九二四年（大正一三年）七月の日本大学専門学校設置申請書類に記載された学則では、正規の学生は男子のみとなっている（『日本大学百年史 第四巻』二〇〇四年、一九九頁）。

つまりこの雑誌は、日本大学専門学校の予算との関係は不明であるが、文芸部の学生だけでなく学外からの投稿も募集し、十銭であっても有料で販売するという、独立性の高い出版物であった。

『資本の拘束を受けない純正芸術』

巻頭言の「吾等の主張」において『小若江文学』の目指す方向が書かれている。まず、学生の同人雑誌だからといって、何の主義主張を持たないというのは間違っているとして、「主義なき文字は空文であり、主張なき文章は徒らに死文のみ」と述べる。では、『小若江文学』はどのような主張をするのか。

現代出版資本の制覇！プロレタリア文学に於てすら不幸にして吾等は其処に是を否定すべき寸隙だに見出し得ないのだ。大概の場合、或る作家が口を酸っぱくして自己一身に関する限り資本の制約を否認すればする程一層吾等は苦々しく思ふ（略）何人にも明瞭なる通り、斯く資本の重圧に歪曲された現代文壇諸派の埒外にあつて、学生文学派こそは殆ど資本の拘束、社会の束縛を受けざる唯一

のものである。而して茲に所謂学生文学とは学生発行文学の謂に外ならぬ。

つまり、商業ベースに乗った出版物では資本から拘束を避けられず、純粹な芸術として文学を追求できない。それは社会矛盾とのたたかいを標榜するプロレタリア文学も例外ではない。学生が自ら発行する文学こそが資本の拘束を受けない真の芸術であるとするのである。主義主張のない趣味的な雑誌でもなく、商業的な出版物でもない、新たな試みをしようにとする若々しい意気込みが伝わってくるだろう。

『校友名簿 昭和四十六年』によれば、例えば昭和七年の卒業生は法律科（一部）三三人、法律科（二部）四四人、商科（一部）八四人の一六〇人にすぎない。この『小若江文学』を通して、少数精鋭の意欲ある若者たちが長瀬の地に集まってきた様子垣間見ることができるとはならないだろうか。

一九二五年（大正一四年）に本学が日本大学専門学校として最初のスタートを切ったころの史資料は、多くは残されていない。今後の一層の史資料調査が求められている。（本記事では史資料中の旧字体を、原則として新字体に改めた。）

各地のアーカイヴズ紹介 3 —甲南学園学園史資料室での 聞き取り調査報告—

九州短期大学准教授

建学史料室研究員 三木 一司

研究プロジェクトで実施している一連の各地のアーカイヴズ訪問調査として、平成二十六年九月三日に甲南学園学園史資料室を訪問し、聞き取り調査を行った。調査には、甲南学園総務部総務課課長の天野裕介氏と同課課長補佐の溝上真理子氏にご協力いただいた。聞き取りを行った調査担当者は、建学史料室研究員の教職教育部・富岡勝教授と文芸学部・酒勾康裕准教授、報告者の三人である。調査内容は、聞き取り調査



甲南学園学園史資料展示室

として学園史資料室の設立経緯、組織形態、活動内容を中心にお話をうかがった後に、学園史資料展示室を見学し、書庫へ移動して資料の収集・保管状況などの説明を受けながら、所蔵資料を閲覧することができた。以下、お話しいただいた内容を紹介する。

学園史資料室は、甲南学園の運営に協力していた伊藤忠兵衛が公職追放後の一九五七年に再び理事長に就任し、自らが委員長となる学園史資料室委員会を設置して学園史資料室を開設したことに始まる。伊藤の尽力により開設した学園史資料室は、創立者平生鈺三郎の精神を継承すること、旧制高等学校時代の資料群の保存及びそれらの活用が目的であった。資料室の活動は、『平生鈺三郎日記』の刊行、年史の編集、『甲南学園史資料室年報』の発行、資料の収集・保管などである。学園史資料室の業務担当は広報課であったが、二〇一三年六月からは総務課へと変更された。現在の運営は総務課課長補佐の溝上真理子氏とアルバイト一人の二人体制となっている。教員は、平生研究会や日記及び年史の刊行に関連する資料室委員会、編纂・編集委員会に参加するようである。

『平生鈺三郎日記』については、平生研究会において研究が進められ、一九九五年に設けられた日記翻刻委員会において平生の三十二年に亘る日記の本格的な翻刻作業が始められた。その後、二〇〇九年から全

十七巻の刊行が開始され、現在十巻までが発刊されている。また、年史は力を注いで編集された五十年史（一九七一年刊）を基礎にして、続く六十年、七十年、八十年の各年史は、各十年分の記述を追加する形で区切りとなる年史、記念誌を刊行したそうである。とくに五十年史は、平生の日記の裏付けのための資料として、調査のための基礎的な文献として活用することであった。

資料の寄贈については、学園史資料室発行の年報などによって依頼を行い、総務課で受け入れ、分類と登録を行っている。収集する資料は主に創立者の平生鈺三郎に関係する日記や書簡などの文書や勲章などの類、学生に関する資料として学生生活に関係するもの、課外活動の記録、写真、旧制高等学校時代のものなどとなっている。収集した資料は、研究者や地域の人たちの研究活動に活用されることも目的となっている。

聞き取り調査で対応していただいた天野氏が課題としてあげたことは、学内事務文書の収集システムが未確立の状態にあるということであった。現在のところ文書の保存は各部署のスタッフの意識に支えられており、今後は総務課から文書の収集及び保存方法を提案して体制を整える必要があるということであった。

最後に、甲南学園では創立者の平生鈺三郎のこぼを集めた発言集を自校史教育のテキストとして使用



学園史資料展示室のある甲南大学1号館

し、甲南小学校では百周年を記念して彼の人生を漫画化した本を作成している。自校史教育は創立者平生の人物教育を中心に展開されているが、天野氏と溝上氏は学園史資料室の活動と自校史教育を通して旧制高等学校時代から続く学園の雰囲気や空感、気概などを在学生に伝えていきたいという強い思いをもたれていた。

今回の調査で何うことのできた甲南学園学園史資料室の活動、資料収集やその活用などの内容、そして、大学のもつ歴史性を伝えていきたいという担当者の思いは参考になるべき点ではないかと思われる。

不倒館を取材して

附属広島高等学校・

中学校福山校マイコン部

部長 岡崎 暢寿

本校のマイコン部では映像作品を作る活動をしており、毎年、中学校オープンスクール（六月）と高等学校オープンスクール（九月）の時に学校紹介映像（八分）を作成しています。また、福山市で行われている私学フェスタ東部地区（七月二十一日）では、学校のある福山市佐波町の歴史について十二分の映像にまとめました。クラブ活動として佐波町の歴史を学ぶことによって地元の方との交流ができ、さらには朝日新聞にも掲載されることで、生徒の自信にもつながってきました。

今回、私自身が六月の附属教研で増田大三副学長の自校学習のお話を聞かせていただき、本校のマイコン部で自校学習について映像を作成することを考えました。生徒たちに話をしたところ、とても興味を持ち今回の活動が動き出しました。私も知らないことが多く、生徒と共に学ぶため、まずは一緒に『炎の人生』『山は動かず』を読むことにしました。そしてお互いに感想を伝え合う中で、生徒たちも不倒館に行ってみたいという希望を持つようになりました。高校一年生と二年生の一部の

生徒は七月二十日のオープンキャンパスに行くことが決まっていたので、その際に不倒館の取材を六人でさせていただくことになりました。

建学史料室の方々に資料を細かく説明していただくことで、世耕弘一先生の壮絶な人生、その中でも常にある不屈の精神、その思いの中で近畿大学が設立されたことを知り、世耕弘一先生に実際に会い話を聞いたという声から出てきました。本校は設立四十二周年（平成二十六年現在）ですが、設立当時からいる教員ですら、世耕弘一先生にお会いしたことがありません。そのような中、本校の初代校長でいらした西川泰弘先生が世耕弘一先生をご存知で、さらに



世耕弘一先生の銅像前で、西川泰弘先生（左から5人目）と記念撮影

は本校の開校当時の様子がかげえることもあり、西川先生に取材させていただくことになりました。九月六日に高校生六人、中学生二人で近畿大学西門の銅像前で世耕弘一先生についてお話を聞き、その後不倒館に移動して、開設当時の福山校の様子などを聞かせていただくことができました。

西川先生の福山校への思いを知ることができて、生徒も背筋が伸びる思いだったと思います。現在は自校学習をまとめる映像を作成しており、完成時にはお世話になった方々にもご視聴いただきたいと考えております。今回の自校学習を通じて、生徒たちも、今学んでいる福山校が世耕弘一先生の思いを受け継いだものであることを知り、今後自分たちがその担い手であるという自覚を持つことができる良い機会になりました。

生徒感想文

高等学校一年 青木 杜斗

私はこの不倒館に行ってみて、世耕弘一先生の一生や近畿大学の創設時の様子がよくわかりました。特に印象に残っていることは、世耕弘一先生が生まれ、幼少期を過ごされた熊野地方のジオラマです。ジオラマには世耕弘一先生が少年時代に住んでいた熊野地方の当時の様子が忠実に再現されていました。私はこのジ

オラマを見て、山や川などの自然あふれる場所に住んでおられた世耕弘一先生が、今の生活では考えられないほど不慣れた環境で苦労されていたことを、一目で理解することができました。

また、その後の人生の中でも印象深いのは世耕弘一先生の学生時代についてです。先生が生きた学生時代は一般家庭では中学校にすらも入学することがかなり難しい時代でした。そんな中でも先生は働いてお金を稼ぎ、生活費や学費に充てていたことを知り、今の私ではとてもできないことだと思いました。特に、大学生時代にされていた、人力車で人を運ぶ仕事は給料が良く、勉強と仕事を両立するという意味ではとてもよい仕事だったと知りました。ただ、私はその人力車に実際に乗ってみて、思っていたよりも大きくて人を運んで行くのは大変だと思いました。世耕弘一先生は人力車の仕事をしている合間に勉強していたことを知り、厳しい時代の中で働きながら勉学に励まれていたことに深い感謝を受けました。そして、私も先生の精神を見習い、この学校で学べることを誇りに努力していきたいと思いました。

高等学校一年 吉出 雅登

私は、不倒館で近畿大学の教育理念「一人に愛される人、信頼される人、尊敬される人になる」がドイツ語

で書いてある文書を見たこと、またその教育理念が生まれたエピソードを聞いたことにより、毎日目にしてこの校訓が、私自身がこれから生きていく上でどんなに大切なものであるかということを実感し、とても印象に残りました。

世耕弘一先生が少年時代に丁稚奉公に行き、大きくて重い木材を運ぶ仕事をしていたことに驚きました。私自身、丁稚奉公という言葉を初めて耳にし、今とは全く違う時代だったことを改めて知りました。私は、

生駒祭の大提灯

建学史料室 澤田 和典

毎年十一月に東大阪キャンパスで行われる大学祭「生駒祭」では、メインステージに「生駒祭」と書かれた大きな提灯が掲げられています。その提灯は高さ約二・七メートル、直径約二メートルと見る者を圧倒する存在感を誇りま

す。しかし、老朽化による損傷は避けられず、平成二十六年に開催された第六十六回生駒祭から東門に掲げられる中提灯とともに新調されました。そして引退した大提灯と中提灯は、建学史料室が預かりすることになりました。

勉強と他のことを両立させることが苦手なので、世耕弘一先生が人力車の仕事をしながら勉強を続けておられたことはすばらしいと思えました。今の私は、勉強の空き時間さえ有効に使えていないので、これからは世耕弘一先生の精神を学んで効率よく勉強していきたいです。今回の体験したことをプレゼンテーションや映像編集によるDVDなどにまとめることにより、たくさんの人に伝えていきたいと考えています。

始めた平成十五年の第五十五回生駒祭で、大学祭実行委員会委員長を務められた平岡章弘さん（平成十五年卒業・法学部法律学科）に、大提灯にまつわる思い出や当時の生駒祭について伺いました。

生駒祭については、この年から開催日程をこれまで三日間だったものを、学部ごとに開催していた学部祭も併せて四日間に変更。また、オープニングパレードからグラウンドファイナルまで、生駒祭を一つのイベントとして開催するようにスケジュールを編成。それまでは、学部祭、体育祭、文化祭や各クラブ主催のイベントなど、生駒祭の期間中にそれぞれ独自に大学祭をしている状態から、皆がひとつの生駒祭を作り上げる形へと改革されたそうです。しかし、当時の生駒祭の運営については「生駒祭の規模は大きく



学生を見守ってきた大提灯（平成25年度生駒祭）

なつたのに、実行委員はこれまでと同じ人数しかいなかったもので、仕事の量が膨大なものになり、運営には大変苦労しました。」と当時の苦労を語ってくれました。

生駒祭の大提灯について何うと、以前の生駒祭では西門のアーチに吊られていたと先輩から伝わっていたものの、しばらくの間使われていなかったと説明。復活させた理由については、「華々しいオープニングパレードが始まるものの、終わり方ははつきりしなかった。」と語る通り、これまでに考えていた課題の解消を目指して、オープニングパレードからグラウンドファイナルまでの舞台に、十号館前の芝生広場にメイン

「学生俵夫」をたどって

建学史料室 木村 道子

不倒館の展示品の中で、ひととき目を引く人力車。近畿大学創設者の世耕弘一先生が、人力車夫をされた「苦学の象徴」として展示されているのは、周知のとおりです。この人力車は、近畿大学台湾校友の皆様のご寄附によって製作されたもので、見るだけでなく実際に乗車することができ、不倒館に訪れる多くの方々に親しまれています。

人力車は、人を乗せて持ち上げるだけなら、比較的かんたんですが、引くとすると大変な労力を要します。私は、不倒館でご案内するうち



不倒館で展示されている人力車

に、弘一先生が人力車をなさった「道のり」に関心を持ちました。どれくらい距離で、どのような道を通っておられたのでしょうか。

人力車のエピソードは、『山は動かず』『炎の人生』などでも紹介されています。それらの中で今回は、ノンフィクション小説「学生俵夫」を参考にしました。

「学生俵夫」(著者 穂積鷲氏)は、昭和十四年発行の雑誌『キング』(十五巻四号)に掲載されています。故世耕弘昭理事長のご記憶のお陰で、五年の歳月を経て見つけ出された幻の一冊は、人力車とともに不倒館にて展示中です。

「学生俵夫」には、弘一先生が、名家であった岩崎家の令嬢を、人力車で女学校へ送迎しながら、ご自身も学校に通い、勉学に励んでおられたようすが描かれています。ここから次の五地点をピックアップしました。

①駒込に岩崎様の別荘がある
(「学生俵夫」一抜刷3頁)

②白山坂も一氣に駆け下り
(同5頁)

③水道橋から九段に入る(同8頁)

④九段の精華女学校(同3頁)

⑤神田正則英語學校に駆けつけ、午後二時かつきりに女學校に引返して、駒込の邸に令嬢を送り込むと、またもや神田の夜學の教室に取って返す(同5頁)

弘一先生が苦学された大正六年頃と現在の東京の地図を比較すると、道路は整備されているものの、岩崎家別邸や学校の場所はおおよそ確認できます。①から⑤の地点をつなぎ合わせて現在の地図上でルートを仮定し、インターネットで検索してみました。片道約六キロ、徒歩では一時間以上かかる道のりです。これを人力車で往復し、更にまた学校へ戻って、夜學に励んでおられたと考えられます。

このたび、東京出張の機会に、弘一先生が人力車を引いて通われた足跡をたどってみることにしました。

岩崎邸の別邸(①)であった「六義園」の上富士前交差点に到着。一月下旬というのに寒気も和らぎ、快晴の下、意気揚々とスタートしました。ところどころにあるお寺や古びた石碑などを目にすると、「弘一先生もご覧になったかもしれない。」という想像がかき立てられ、足はどんどん進みます。

交差点で立ち止まり、地図を確認しながらその先を見て、思わず声をあげました。「白山坂」(②)です。三〜四百メートルほどの急な坂があることは、事前に調べていましたが、実際に見る傾斜に圧倒されました。人力車を引いて、この坂を上るのは、体力に自信のある方でも容易ではないでしょう。これだけ急だと上りだけでなく、下りも大変です。また、人力車に乗って(乗せられ)、この坂を見下ろした令嬢は、どんなに恐ろしかったことでしょうか。

ゴールはまだ先です。氣を取り直して、次の地点を目指して、また歩き始めました。下り坂が更に続き、水道橋(③)へ着く頃には、足が痛み始め、最初の勢いはすっかりなくなっていました。

九段の精華女學校(④)は、現存していませんが、千代田区観光協会のホームページによると、現在の千代田区役所の側に、「九段精華學校発祥地」という石碑が残っているそうです。残念ながら、この日は工事中のため、石碑を確認することができませんでした。

強い風が容赦なく吹きつける中、やっとの思いで「正則英語學校」(⑤)(現 正則学園高等学校)に到着しました。途中、写真撮影をしたり、道を誤ったこともあり、スタート地点で設定しておいたスマートフォン、の計測は、八・四六キロメートル、二時間三十分を記録していました。何とかゴールできたことに、ほっ



弘一先生の足跡をたどるスタート地点の上富士前交差点

とした瞬間、私はある文章を思い出し、また絶句しました。

以前、読んだ『人力車』(昭和五十四年発行 著者 齊藤俊彦氏)の一節です。

日本の道路は戦後の盛大な投資によって、見違えるほどに改善され、かつて人力車が走った石ころの多い未舗装のうねうねした細い道を思いおこすことは容易ではない。人力車を勢よく引いて疾走した足腰の強い労働力をいまの世代に求めることは、もはや不可能に近いであろう。(十一頁「序文」今津健治氏(神戸大学))

インターネットで事前に調べた内容と、実際に歩いた道に大きな違い

はありませんでした。しかし、印象は大きく違いました。白山坂の急傾斜は、想像を絶するものでしたし、緩やかな長い坂道の厳しさは、歩いたからこそ体感できたことです。今回は天候に恵まれましたが、雨の日も雪の日も、暑い日もあったことでしょう。弘一先生は、約百年前のアスファルト舗装もされていないこの道のりを、人力車を引いて通っておられたのです。

弘一先生の体格が、決して大きくはないことは、写真やビデオ、或いは不倒館に展示している「勲一等瑞宝章を佩用されているモーニング姿」から推察できます。小柄なお身体で、この険しい仕事に挑まれた世耕弘一先生の強靱な精神と、向学への志の高さを改めて感じた道のりでした。

不倒館を訪れた方々

不倒館には、卒業生や元教職員の皆さんも多く訪問して下さっています。特に、校友会の見学依頼やホームカミングデーでは、「久しぶりの母校で、新しさと懐かしさの両面を感じることができた。」と喜びの声をいただいています。

開館日は、不倒館ホームページに掲載しています。また、開館日以外の見学もご相談いただけます。不倒館へ是非、お立ち寄りください。



平成26年11月に訪れた校友会中華民国在日支部の皆さん



平成26年9月開催のホームカミングデーで訪れた元職員の方々の皆さん

建学史料室からのお願い

▼史料収集

世耕弘一先生、政隆先生、弘昭先生ご生前の関係史料(出版物、書簡写真、録音テープ、ビデオ、その他何でも結構です)を、現在もお手元に保管されている方々に、その関係史料のご寄贈又は複製でのご提供を賜りたく、当史料室では広く皆様方にご協力をお願いしております。詳細につきましては、史料室へご一報いただければと思います。

▼ホームページ

不倒館の開館日・時間は、近畿大学ホームページ「不倒館」創設者世耕弘一記念室」のサイトでお知らせしております。

近畿大学ホームページのトップ右下にある(不倒館 創設者世耕弘一記念室 立像の画面)を選択してください。

▼ご意見感想をお待ちしています

本誌や不倒館ホームページへのご感想やご意見をお寄せください。お寄せいただいたお便りについては、今後の本誌などの編集に役立てさせていただきます。また、こちらからお問い合わせをさせていただきます。場合や、広報誌の中でお名前とともにご紹介させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

お問い合わせ先

〒五七七-八五〇二
東大阪市小若江三-四-一
近畿大学 建学史料室
電話 (06) 433-0713(091)
(ダイヤルイン)
URL <http://www.kindai.ac.jp>

不倒館入館者数の報告

平成二十一年九月に開設以来の不倒館入館者数を年度別で報告します。

平成二十一年度	一九五一人
平成二十二年度	二四四六人
平成二十三年度	二五七九人
平成二十四年度	二九七一人
平成二十五年度	四一七二人
平成二十六年度 二月末	三二八六人
総数	一七四〇五人